新左衛門の思ひ出

鶴澤道八

新左衛門は私にとつてはたつた一人の六十年間の友達でした。

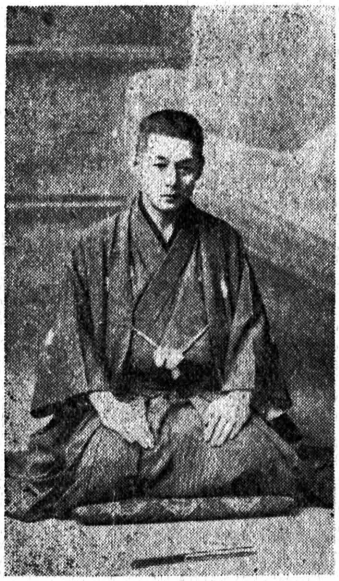
松吉といつて、松太郎さんのところへ弟子入りしたのは私が三味線彈きになつたのより一年程後だつたと思ひます。年はあつちの方が二つ上ですが、若い頃に「おなえ年や〳〵」といつてゐましたので、後年になつて「あいつ若い時おなえ年やつたのにいつの間にやら二つ下になつてしまひよつた」といつてゐました。

最初は因講の寄合で顔を合せてゐる筈ですが、そのときの記憶はなく、二人がはじめて親しくなつたのは明治十三四年の頃でせう姫路へ旅興行に行つたときからです この興行は太郎助橋の住太夫さんに勝七師匠がシンで、二枚目は假名太夫さんに松太郎さんで、二人ともに師匠のお伴をして行つたので大阪を朝一番の汽車で立つて神戸まで行き、それから人力車に乘り、丁度明石が晝で、夕方遲く姫路へ着きました。このときに姫路で二人一緒に撮つた寫眞が宅にありますが、今思ふとどんな氣持で寫したのか、おかしいやら懐しい思ひ出です。

この旅の後大阪へ歸つてからは私は師匠と〻もに松島の文樂座に出勤し、松吉は松太郎さんがずつと外の芝居（文樂座以外の人形芝居）に出て居られました關係上師匠について出勤してゐましたから松島の文樂座へは出たことがないでせう。その後彦六座の前身になる日本橋北詰の澤の席が出來たときたしか出てゐたと思ひます。彦六座へ入つたのは私の方が先で、松吉は彦六座の改築が出來た明治十七年九月、松太郎さんが駒太夫（五代目）さんの合三味線で入つて來られたとき師匠について來たのです。このときは清水町の師匠も「三番叟」の三味線で初めて出られたときで、松吉も私もその豆喰ひに出して頂きました。これが二人が同じ床に出た初めで、この後は

一緒に出たことは割合に少なかつたのですが、彦六座では私達二人をお互に競爭相手にして勵むやうに、役もそのやうにしむけ、番付なども常に同じ位置の筆上と筆下と隔月交代に座りました。こんな例は最近は珍らしくありませんが當時としては全く珍らしいことで、私達二人の外には例がありませんでした。

年月をはつきり記憶しませんが、やはり彦六座のごく初期のことで、船場のどこかのお廓敷で三味線會のやうにして「妹背山三段目」を、松屋町が大判事、松太郎さんが定高、仙次郎さんか富助さんかゞ久我之助、兵三（後の六代目吉兵衛）さんがひな鳥の役割で勤められたとき、私達二人が特に選ばれて、私が染太夫の方を、松吉が春太夫の方を彈きました。このときは大變なきゝ手で、中々の盛會でした。これが明治十七八年の頃のことでせう、そして五十年後の昭和八年の暮に東京の歌舞伎座で「山の段」を二人がまた同じ配役で勤めました。この時は松太郎さんが二度もきゝに來て下され、三人で昔のことを語り合ひました。



新左衛門襲名當時ノ面影

これも彦六座時代のことですが、當時樂屋で「ハリキリ角力」といふのをよくやりました。これはおもちやの土俵をこしらへてその兩側に三味線が調子を合せて置いてあつて、一二三でその前へ座るなり「テヽン」と「ハリキリ」を打ち、それを審査員がきいて勝負を定めて番付を作るのですが、三味線は自分のものを使はれず、座ると同時ですから調子を合すことも許されず、撥だけは自分のを使ひました。審査員は大隅さん、組さん、松屋町などで、「今の誰某のは後の撥が死んだとか、息がまぬるかつた」とかで軍配を定めるのですが、時によつては審査員同士がモメることもありました。この「ハリキリ角力」に、松吉は小松山、私は友綱、時によつて友千鳥と名乘つて盛んに戰ひましたが、大ていのは私達二人が兩方の大關でした。いくら三味線をよく彈いてもこれ

は「ハリキリ」一度だけのことですから、外せばそれきり負げで、源吉さんや仙次郎さんなどは小結になつたり時には前頭に下つてゐたこともありました。これはお互の修行時代の思出で、それから松吉は芳太夫、生島太夫や時には七五三太夫を彈き、松三郎と改めて春子太夫を彈くやうになり、清水町の師匠の最後の舞臺の興行で新左衛門になつたのです。一方私は隅榮太夫や七五三太夫生島太夫を彈き、この當時に松吉と一日替りの役があつたりして、その後伊達太夫（後の土佐）を彈き、明治卅五年ぎりで一時引退してしまつたのです。

新左衛門は新町の出で、お父さんを私は知りませんがおぢいさんは大工で、越後町邊の露路に住んでゐましたお母さんはおじゆ（壽）さんといつてもとは出てゐた人ださうですが、私が知つてからは今の新町演舞場の横手の邊で、たしか「林」といつたと憶えてゐますが小茶屋をしてゐて、新左衛門はこの家で大きくなつたのです。兄弟はなく、大切な一人子で、商賣柄でもあり、私と違つてお小遣には不自由をしてゐませんでした。ずつと後に新左衛門、京都の木屋町（後に東山）で「壽」といふ旅館をしてゐましたのはお母さんの名前から取つたのだと思ひます。

藝は御存じの通りの天性綺麗な音の、マクレぬ、よい藝で、死ぬまでボロを出さず終ひでした。春子太夫があそこまで語れてゐたのも全く新左衛門が彈いてゐたからです。

近年は大分年を取つてゐました。それもその筈で、家へ歸れば二人も孫があつて「おぢいちやん〳〵」と呼ばれてゐたからで、私がよく「おぢいちやんなんていはすな、お兄ちやんていふてもらへ」といつてやりました。この間も何處かのお葬式か何かで出會つたとき、息子が後からついて、杖をつきながら歩いてゐましたから「お前なんや、その杖」と聲をかけましたら「ステッキやがな」と痩我慢をいつていました。それにつけても可愛さうで堪らぬのは晩年の舞臺の待遇でした。何といつても長い間よいのもきゝ、叩き込んだ腕ですから、老いたりと雖も床へ上つて三味線を彈けば、若い者の五人や十人かゝても叶ふ筈はありません。この一月に彈いた「茶屋場」でも、太夫は若い者許りで、それを新左衛門が彈いたればこそ「茶屋場」になつたのです。外のものではとてもあれだけ太夫を引張つて行けません。また二月は、「石屋の寶引」の掛合で、一月興行の終り頃に、樂屋で誰かゞ「お稽古を」と頼んだとき、新左衛門が「お前憶

えた通りどないでも語り、わしどないでも彈くよつて、しかし聞えるやうにいふてや」といつてゐたのを傍で聞いたときはほんとうに可愛さうに思ひました。死んだ鍛太夫を彈いてゐる間でさえブツ〳〵いつてゐて、よく私が「そない贅澤いふたかてあかへん、昔と違ふて今は總體が惡なつてんねんさかい」となだめてゐたのですから「寶引」の連中に對してそんなにいふのは無理はないのです。いつかも「この頃は幼稚園の先生や、鳩ポッポといふて手をたゝいて子供を連れて歩かしてんねん、しかし此頃の子供は中々手强うて先生のいふことき丶よらん」といつてゐました。聞けばこの秋には引退するといつたさうで、近頃のやうに虐待されてゐたら、引退するといひ出すでせう。その時は役によつてツレ彈きにでも出て、花を添えてやらうと思つてゐましたのに。

丁度私は東京の歌舞伎座に出てゐる留守中に死んだので、電報が來たときは役前でしたから私にかくしてあつらしく、役を終つて相生太夫が披露しましたが、あんまり悲しかつたので聲を立てゝ泣きました。宿へ歸つてからも次から次と懷しい思出が頭に浮んで來て、新左衛門の顏が幻から遁かず、その夜は一睡も出來ませんでした。親子でも六十年一緒に居ることは殆んどでありませんから、親身の者に死別するより悲しい思ひでした、實際娘を亡くしたときでもそんなに泣きませんでした。

お正月に會つたとき、「お前とこ今年は喜の字のお祝やな、お祝くれよ」といひましたら、「うんお祝しようと思てるねん、お前とこへもやるさかいお返へしくれよ」といつてゐましたのに、香奠を供へねばならぬことになつてしまひました。

（附記）本文に見える故新左衛門師が道八師と一緒に撮った珍しい寫眞が原稿締切に間に合はなかったことは申譯ありません（係）

秋草彌三郎

文樂人形淨瑠璃繪展覽會

會期　六月廿五日より卅日まで

會場　大阪　三越　六階